二葉館あれこれ Vol.4

網代天井

二葉館の2階に、「旧婦人室」（和室1）という部屋があります。この部屋には貞奴がごく親しい人しか招き入れなかったといわれています。その北側に「次の間」（和室2）という部屋があります。この部屋の正面奥に畳3畳分の小さな仏間があり、そこには幼い頃から貞奴が信仰していた不動尊が祀られていたようです。

今回注目するのは、仏間の天井「網代天井」です。網代天井は一般的に、床の間や茶室の天井に多く見られます。二葉館の網代天井については、屋久島から取り寄せた屋久杉を薄い板にして網代編みにしてあります。

網代天井

この1枚1枚の薄い板は、縦に削いであるのではなく、わざわざ斜めに削いであるため、非常にデリケートなつくりになっています。現在、天然の屋久杉は伐採が禁止され手に入らないため、素材としても大変貴重です。

さらに目を凝らして天井を見てみると、板の木目が表情豊かなことに気づかされます。網代天井の木材には、反りや収縮が少ない柾目（年輪が平行な木目）を使うことが多いようですが、ここの天井は杢目（紋様が出ている木目）を使って編んであるため、装飾性が高いうえに珍しく、手が込んでいるのが特徴です。

この2階の和室を含む和館部分は、主に大正時代の建築資材を利用しており、登録有形文化財に指定されています。仏間に掛けられた照明器具も当時のものです。

建物の意匠や調度品につい目が奪われてしまいますが、ぜひ和室の天井も見上げてみてください。優れた職人の技術がご覧いただけます。

仏間

次の間（和室2）

文化のみち 番外編④ ぶらりさんぽみち

「成田山貞照寺」

今回は川上貞奴の建立したお寺を紹介します。

貞奴は幼い頃から信仰心が大変深く、12歳の時に養母が大病を患った際、千葉の成田山新勝寺を参拝し、病気平癒を祈願して酷寒の中で水垢離（みそごり）の行に励んだところ、その病が治ったと語り継がれています。それ以来、生涯をお不動様の信仰につとめ、幾多の障害を乗り越えるご加護を戴くことができたとのことです。

晩年、貞奴の信仰の集大成として、木曽の清流のほとり、現在の岐阜県各務原市鵜沼に聖地を定め、当時の金額で35万6千円、現在の価値にして約25億円の私財を投じて、約六千坪の境内地に、本堂・鐘楼堂・仁王門・御手水舎・庫裡等を建立しました。

施工は伊藤平左衛門（尾張藩工匠の名跡で初代は名古屋城の築城に関わる）、本尊は不動明王尊で仏師小川半次郎最後の作です。本堂の八枚の胴羽目板には、貞奴が信仰の中で授かった不動明王尊の霊験記を表した浮き彫りが施されています。大変見事なこの彫刻は昭和の名工といわれた金子光清の作です。

建立時は「金剛山桃光院貞照寺」と称し、昭和8年10月28日に落慶入仏法要が行われました。以来、昭和21年に76歳で波乱の生涯を閉じるまで、この貞照寺で仏道三昧の日々を過ごしました。本堂を出て右手奥に進むと貞奴の霊廟があり、しずかに祀られています。

貞奴の没後、寺は一時荒廃しましたが、昭和35年に成田山名古屋別院が管理するようになり大修復の上、「成田山貞照寺」として再建されました。

現在では、女優第一号の貞奴に因んで、「諸芸上達、芸能の寺」として、芸の道に精進する人たちが参拝に訪れています。本堂を囲う玉垣には、寄進の歌舞伎役者の名前が彫られ、本堂の中には、参拝に訪れた著名人の札も見られます。

本堂の中、須弥壇に向かって右側には、伊藤博文の腹心で後に内閣総理大臣も務めた西園寺公望揮毫の「貞照寺」の額が掛かっています。

また、本堂左側にある「貞奴縁起館」には貞奴の愛用品や調度が展示され、本堂右側の庫裡でもゆかりの品や貞奴にまつわる作品のポスターなどを見ることができます。

作家城山三郎も取材に訪れた貞照寺で、貞奴をより身近に感じてみてはいかがでしょうか。

SHIKI 四季おりおり ORIORI

文化のみち二葉館では年間を通じて様々なイベントを開催しています。今回は定期的に開催している人気イベント「ふたば茶屋」と「正調名古屋甚句・端唄無料体験講習会」「三味線初心者無料体験講習会」についてご紹介いたします。

※詳しくは裏面をご覧ください。

ふたば茶屋

文化のみち（名古屋城から徳川園にかけての東西約3㎞のエリア）の中間地点にあたる立地を活かし、毎年2回、夏と秋に「ふたば茶屋」をいう催しを開催しています。

1階集会室とテラス周辺を茶屋に見立て、入館先着100名の方にお抹茶（和菓子付き）のサービスをいたします。

大正ロマン溢れるこの館で、憩いのひと時を過ごしてみませんか。

今年は8月6日（土）、11月3日（木・祝）開催

※整理券を11時より配布します。

「正調名古屋甚句・端唄無料体験講習会」「三味線初心者無料体験講習会」

伝統芸能に親しんでいただくため、「正調名古屋甚句を拡める会」「端唄　華房流華の会」のご協力のもと、無料体験講習会を年4回開催しています。

「正調名古屋甚句・端唄無料体験講習会」では、『正調名古屋甚句』をはじめ、川上貞奴を題材にした『貞奴甚句』なども体験できます。

『正調名古屋甚句』とは江戸時代に名古屋大須観音の辺りの遊郭「旭廓」で唄われ始め、熱田・宮の宿にかけて広まったと言われる三味線音楽です。『端唄』も同じく江戸時代に爆発的に流行した伝統音楽で、現代でいうポピュラー音楽・流行歌です。

「三味線初心者無料体験講習会」では三味線の構え方や音の出し方など基礎的なことから体験できます。

どちらの講習会も初心者の方を対象とした講習会です。小さなお子様から外国のお客様までどなたでもご参加いただけますので、ぜひこの機会に伝統芸能を体験してみませんか。

今年は9月10日（土）、12月3日（土）開催

※各講習会先着申し込み15名限定。

※三味線は当館でご用意します。

from Archive 書庫棟から 1 企画展

二葉館では、年に数回ほど郷土ゆかりの文学に関する企画展を寄贈収蔵品を元に催しています。今回は、その準備から開催までの流れについてご紹介したいと思います。企画展はご存命の作家、すでに鬼籍に入られた作家、同人誌活動に焦点を当てたものなど、毎回取り上げる対象が様々です。

まず、企画構想が決まると、作家ご本人もしくはご遺族、監修者など関係者のもとへ伺い、企画概要を説明し、ご協力のお願いをします。その時点で、拝借できる資料、作品やその背景についてお話を伺い、構成を練ります。

企画展を作り上げるには、館内スタッフはもちろんのこと、関係各所の担当者の協力が不可欠です。企画展を広く知っていただくためのチラシやポスターなど広告物の制作は、デザイナーと何度か話し合い、デザインやレイアウトを決めていきます。広告物が出来上がり納品されると、少しずつ形になっていくことを実感します。ラジオに出演して紹介したり、新聞やホームページへの掲載も大切な広報活動です。

そして、開催日が近づくと、会場設営の準備に取り掛かります。限られたスペースのなかで、構成ストーリーを考え展示物を配置していきます。年譜や著作一覧などのパネル印刷やキャプションを制作したり、説明文や資料をパネルに仕立てたりなど、お客様に分かりやすい展示を心掛けます。文学の展示は、どうしても文字ばかりになってしまうので、写真や絵など色彩をプラスして目を休めつつ、興味を持っていただけるよう工夫しています。これからも、皆様に魅力的な企画展だと思っていただけるような展示を考えていきますので、是非、楽しみにしていてください。